

# 息長古墳群 1

—遺跡詳細分布調査報告書—

2 0 0 0

滋 賀 県 坂 田 郡

近 江 町 教 育 委 員 会

## 序

近江町は、古代より近畿・東海・北陸を結ぶ交通の要衝とされ、滋賀県内においても、周知される埋蔵文化財包蔵地の多い街として知られています。

今般、報告をいたしますのは、滋賀県北東部に伸びる横山丘陵の南端部に位置する息長古墳群の詳細分布調査の成果です。この古墳群の一部を構成する塚の越古墳や山津照神社古墳といった後期前方後円墳の存在は、古くから知られており、後期を中心とした古墳群と認識されていましたが、京都大学文学部考古学研究室の面々をはじめとした調査参加者の積極的な調査活動によって、前期から後期へと連綿と続く古墳群であることが明らかになりました。

この報告が、地域史研究や埋蔵文化財保護への理解と認識を深めるために幾分でも寄与することができれば、幸いです。

末筆になりましたが、同事業にご協力いただきました関係諸氏・関係諸機関に熱く御礼申し上げます。

2000年（平成12年）3月

近江町教育委員会

教育長 北川 孫一

## 例 言

1. 本書は、国庫補助事業埋蔵文化財（息長古墳群）遺跡詳細分布調査の報告書であり、平成8年度より平成11年度までの4年間に実施した事業の報告にあたる。
2. この事業では、近江町に所在する息長古墳群の詳細分布調査を中心として、遺跡保護資料を作成する測量調査を実施した。
3. この調査の事業経費および各補助金は、以下のとおりである。なお、平成9年度および平成10年度については、個人住宅等建設に伴う町内遺跡発掘調査経費を除算した金額となっている。

	国庫補助金	県費補助金	町費負担金	計
平成8年度	1,500,000円	750,000円	750,000円	3,000,000円
平成9年度	1,500,000円	750,000円	750,000円	3,000,000円
平成10年度	1,000,000円	500,000円	500,000円	2,000,000円
平成11年度	500,000円	250,000円	250,000円	1,000,000円

4. 調査体制は下記のとおりである。

調査主体	近江町教育委員会	教育長	北川孫一
調査事務局	社会教育課長		世森増信
	文化振興係長		宮崎幹也
	社会教育課 主任		北川久志（平成8年度～10年度）
調査補助員	谷口千夏（現・近江町はにお館）		・高橋元子

5. 本書をまとめるにあたって、下記の方々から指導、助言を得た。記して謝意を表する次第である。

赤澤徳明、赤塚次郎、網谷克彦、一之瀬和夫、岩田貴之、上原真人、魚津知克、宇野茂樹、江谷 寛、円城伸彦、小笠原好彦、大沼芳幸、大橋信弥、小野山節、粕渕宏昭、桂田峰男、河内一浩、北口聡人、北原 治、近藤 滋、坂口英毅、清水眞一、寿福 滋、鈴木香織、高居芳美、高橋克壽、高橋順之、高橋美久二、田井中洋介、田中勝弘、土井一行、中井 均、中井正幸、中川治美、中川通士、永江寿夫、西田 弘、林 博通、菱田哲郎、平井美典、広瀬繁明、古野四郎、細川修平、堀 大輔、丸山龍平、南 孝雄、村木二郎、森口訓男、森下章二、山中一郎、吉田秀則、用田政晴、和田晴吾

（五十音順、敬称略）

6. 測量業務については、人塚山古墳を株式会社イビソクに、後別当古墳・大正寺古墳・奥深3号墳・同4号墳を金城測量設計株式会社に委託して実施した。

- 7, 本書で使用した方位は、新平面直角座標系VIを基準としている。また標高はTP（東京湾平均海面高度）を用いた。
- 8, 本書で使用した遺物写真については、寿福写房（寿福 滋）の手を煩わせた。
- 9, 本書の執筆・編集は、宮崎幹也が担当した。

## 目 次

第1章 息長古墳群分布調査の概要	1
第2章 息長古墳群形成以前	4
第3章 息長古墳群の概要	6
第4章 まとめ	28

## 挿 図 目 次

第1図 息長古墳群の主要古墳	2
第2図 法勝寺SDX323遺構平面図と遺物	4
第3図 西円寺第1号墓平面図	5
第4図 定納1号墳～5号墳	7
第5図 甲冑1号墳・2号墳	9
第6図 アミタビ古墳	9
第7図 日撫山古墳	10
第8図 西円寺第3号墳	10
第9図 顔戸山砦1号墳	11
第10図 後別当古墳	12
第11図 大正寺古墳	13
第12図 塚の越古墳と出土した石見型盾形埴輪	14
第13図 狐塚1号墳～5号墳	15
第14図 狐塚5号墳	17
第15図 狐塚5号墳から出土した埴輪(1)	18
第16図 狐塚5号墳から出土した埴輪(2)	19
第17図 狐塚5号墳から出土した埴輪(3)	20
第18図 狐塚5号墳から出土した埴輪(4)	21
第19図 狐塚5号墳から出土した埴輪(5)	21
第20図 狐塚5号墳から出土した鳥形木製品	22
第21図 出土した無蓋高杯(埋塚古墳・西円寺第3号墳)	22
第22図 山津照神社古墳	23

第23図	人塚山古墳	24
第24図	奥深3号墳・4号墳	25
第25図	黄牛塚古墳と主要出土遺物	26

## 図版目次

図版 1	(上) 定納5号墳測量風景
	(下) 定納5号墳測量風景
図版 2	(上) 甲塚1号墳
	(下) 甲塚1号墳の葺石
図版 3	(上) 日撫山古墳
	(下) 顔戸山群1号墳
図版 4	(上) 塚の越古墳
	(下) 塚の越古墳 裾部の葺石と柱穴列
図版 5	塚の越古墳出土石見型盾形埴輪
図版 6	(上) 北陸自動車道側道下で検出した塚の越古墳の一部
	(下) 山津照神社古墳出土の金銅製冠
図版 7	(上) 狐塚5号墳出土の埴輪
	(下) 狐塚5号墳出土の鳥形木製品

## 第1章 息長古墳群詳細分布調査の概要

### 位置と環境

息長古墳群の所在する滋賀県坂田郡近江町は、西に琵琶湖を擁し、北は長浜市、東は山東町、南は米原町に接している。滋賀県の中で「北近江」もしくは「湖北」と呼ばれる地域の一面を占め、冬季には降雪地帯にも含まれる。平地の大半は、琵琶湖に注ぐ天野川の堆積作用によって作られた沖積地で、縄文時代早期から中世にいたる多くの遺跡が分布している。また同地域は、北陸への東山道の分岐点にあたり、近畿地方のみならず、東海地方や北陸地方のさまざまな文化が波及し、融合しながら在地の文化を築いてきた。

近江町内の遺跡を概観すると、縄文時代早期に始まり、各時代の遺跡が存在し、弥生時代には低地部に方形周溝墓を中心とした墓制の広がり確認され、弥生時代後期から古墳時代初頭期にかけての土器や埴輪には、在地の発展とともに東西の文化の波状的な流入が認められる。また天野川河口に存在した「朝妻湊」は、湖上交通の基点として、古代以前から機能していたと推測される。

このような「交通の要衝地」といえる近江町に存在する「息長古墳群」であるが、従来から「後期の古墳群」という評価を受けており、前期・中期の古墳については、あまり知られていなかった。これは「塚の越古墳」や「山津照神社古墳」といった後期前方後円墳が、継体天皇擁立に深く関わった古代近江の豪族「息長氏」にゆかりのある資料として古くから注目されてきたことに影響されたことである<sup>13)</sup>。

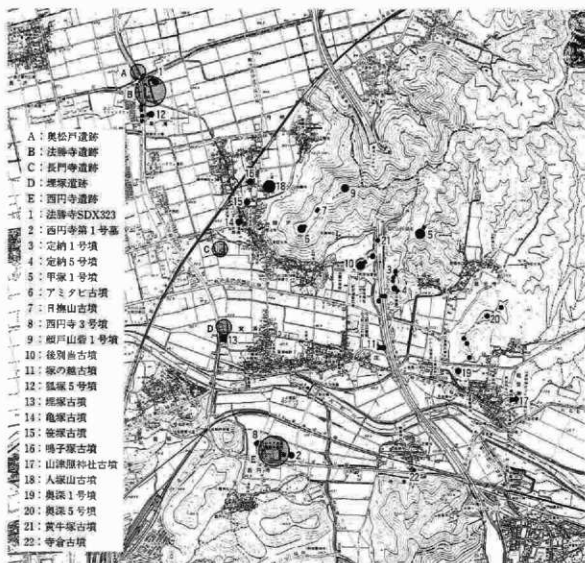
これに対して、前期から中期にかけての古墳群としては、高月町から湖北町にかけてひろがる古保利古墳群や<sup>14)</sup>、長浜市の横山丘陵北端の長浜古墳群に、大型の前方後円墳の築造が認められ、それらの規模から息長古墳群より優勢なものであったが、6世紀になると前方後円墳は衰え、それに代わるように息長古墳群が平野部に築かれるようになったと理解されてきた。

近年の平野部における発掘調査では、定型化以前の古墳、埋没古墳が発見されたのをはじめ、それまで周知されていた古墳についても詳細が明らかにされ、この古墳群が、前期・中期・後期と続く古墳群であることが明らかになった。

### 遺跡詳細分布調査

近江町教育委員会では、平成8年度から10年度にかけて、国庫補助金と県費補助金の交付を得て、現地踏査と測量調査を中心とした「遺跡詳細分布調査」を展開し、翌11年度に報告書の刊行をおこなった。

息長古墳群の分布調査については、今回の分布調査が最初の機会ではなく、過去にも数度の調査例がある。この地域の古墳群に注目し、分布調査が行われたのは約30年前のことであり、



第1図 息長古墳群の主要古墳

滋賀大学や立命館大学の大学院生・大学生によって精力的な作業が進められていた。当時の調査は、「調査カード」という形で、近年まで地元自治体に保管されており、個々の古墳の規模や表面採集資料について詳細が記されている。

これらの分布調査データは、極めて貴重なものであったが、北陸自動車道の建設事業に際しては利用されておらず、黄牛塚古墳の調査を除き、息長古墳群を構成する「塚の越古墳」「定納6号墳」「同7号墳」は、半壊あるいは全壊という形で影響を受けている。

北陸自動車道の開通以後、しばらくの間、息長古墳群に関連する調査はみられなかったが、平地部で展開される埋蔵文化財発掘調査によって、「法勝寺遺跡の前方後方形周溝墓」「西円寺遺跡の円形低墳丘墓」などの定型化する以前の古墳が発掘され、「塚の越古墳」「狐塚1号墳～5号墳」「埋塚古墳」「西円寺第3号墳」をはじめとした埋没古墳の調査例が増加した。

さらに、平成4年度(1992)以降になると、京都大学文学部考古学研究室による「甲塚1号



墳・2号墳の測量調査(1992年)」「顔戸山砦1号墳の測量調査(1993年)」,さらに「山津照神社古墳の測量調査・発掘調査(1994年)」が実施され、息長古墳群の実態が少しずつ明らかにされ始めた<sup>(23)</sup>。

今般の詳細分布調査では、息長古墳群を西部地区・中央部地区・東部地区に三分し、それぞれ年度別に調査を実施したが、これらの調査に際しては、京都大学文学部考古学研究室の方々に多大なる協力と援助を受けた。

初年度にあたる平成8年度の調査は、西部地区を対象としており、「人塚山古墳」の測量を実施したほか、「アミタヒ古墳」「日撫山古墳」「顔戸山砦1号墳」の測量図を整備した。

2年目にあたる平成9年度の調査は、中央部地区を対象としており、「後別当古墳」「大正寺古墳」の測量調査をしたほか、「甲塚1号墳・2号墳」の測量図を整備した。また京都大学文学部考古学研究室の有志による「定納1号墳～5号墳」の測量調査が実施された<sup>(24)</sup>。

3年目にあたる平成10年度の調査は、西部地区を対象としており、「奥深3号墳・4号墳」の測量調査を実施し、「塚の越古墳」「山津照神社古墳」の測量図を整備した。

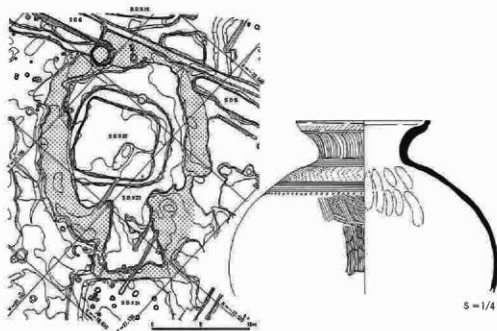
また最終年にあたる平成11年度は、過去3年間に実施した詳細分布調査の成果をまとめ、報告書として刊行するにいたった。

## 第2章 息長古墳群形成以前

息長古墳群の形成される以前、弥生時代後期段階における近江町では、集落遺構の一部と、5箇所からなる墓域が確認されている。これら5箇所の墓域は、いずれも「方形周溝墓」から構成されており、北から順に、奥松戸遺跡、法勝寺遺跡、長門寺遺跡、埋塚遺跡、西円寺遺跡と呼ばれている。

奥松戸遺跡と法勝寺遺跡は、一級河川「土川」を挟んで南北に位置しているが、弥生時代後期の段階では、同一構成を示すものと推測され、現行の「土川」は、古墳時代以降に現位置に移動したものと考えられる。奥松戸遺跡・法勝寺遺跡は、北接する長沢遺跡と対になるもので、奥松戸遺跡・法勝寺遺跡が弥生時代中後期の墓域区、長沢遺跡が同居住区となり、西側に水田区を広げることが想定される。これまでに奥松戸遺跡では、法勝寺遺跡に接する位置で4基の方形周溝墓が確認されており、法勝寺遺跡では、100基を超える方形周溝墓が確認されている<sup>(28)</sup>。法勝寺遺跡の墓域区では、中期から後期にかけての4時期の変遷が確認されており、最終期には中核をもった墳墓群の構成が認められ、その中核には、前方後方形周溝墓(SDX323)や、大形方形周溝墓の存在が確認されている。

長門寺遺跡と埋塚遺跡は、弥生時代の沼沢地跡をはさんで南北に位置している。1988年に実施された埋蔵文化財試掘調査では、天野川右岸を斜行する弥生時代の小河川群が発見され、現在の近江町役場西隣で停滞し沼沢地化していることが判明している。この沼沢地の北側には長



第2図 法勝寺SDX323遺構平面図と遺物

門寺遺跡の方形周溝墓3基、南側には埋椀遺跡の方形周溝墓2基が確認されている。なかでも、長門寺遺跡の方形周溝墓では、周溝内より胴部の拡張した壺、受口状口縁甕、手焙り形土器などが出土している<sup>(26)</sup>。

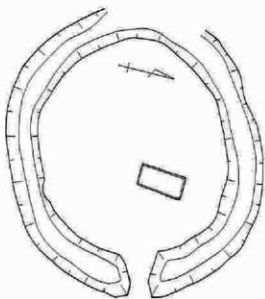
西円寺遺跡は、天野川以南に位置しており、前4つの遺跡に比べて後出し、弥生時代終末期から古墳時代にかけて存続する。遺跡の北端では、幅7mの大溝が確認されており、東端を区切る菜種川とともに「環溝」を構成する。この環溝の内側では、東南に居住区、北西に墓塚区があり、墓域には円形低墳丘墓が出現する<sup>(27)</sup>。

このように、弥生時代中後期には、5つの方形周溝墓群が構成されており、各墓域の中に群墓構成が現れ、中核墓として「大形の周溝墓」や「異形の周溝墓」を出現させながら古墳時代の前期を迎えることとなる。

また平地のなかでは、天野川右岸の平地に出現していた小河川群が集約され、大形の溝として、横山丘陵の南西裾部を巡りながら、麓の集落遺跡に水利を引いていることも明らかにされている。この大溝は、現在の能登瀬集落あたりで天野川から分水しているものと推測され、双葉中学校前の神田遺跡で最初に出現し、顔戸の西ノ辻遺跡で南北に分かれる。

北流する大溝は、顔戸遺跡・高溝遺跡・法勝寺遺跡を抜けた後、西折して碓遺跡へと通じる。顔戸遺跡では大溝に隣接して古墳時代前期の大形掘立柱建物、高溝遺跡では大溝の中から小形儀統を用いた水辺祭祀遺構、法勝寺遺跡では多量の土器廃棄が確認されている。

南流する大溝は、黒田遺跡で方向を北に向け、先の碓遺跡へと通じる。黒田遺跡では大溝に接して舟形の土壌が構築され、刀形木製品・蓋形木製品をはじめとした木製品と、北陸・東海・近江・四国など各地の土器を用いた水辺祭祀遺構が発掘され、同時に大形掘立柱建物数棟も見られている<sup>(28)</sup>。



第3図 西円寺第1号墓平面図

### 第3章 息長古墳群の概要

#### 定納1号墳

定納地区の古墳は、計7基で構成され、近江町新庄・日光寺地先に所在する。横山丘陵の南部、北東から南西方向に張り出した尾根上に群をなす。そこから南は、天野川越しに美濃地方へ抜ける東山道を見下ろすことができ、西には琵琶湖を見晴らすことができる。

古墳の発見は、北陸自動車道の敷設工事以前に遡り、滋賀大学・立命館大学の踏査によって明らかにされた。この段階で明らかにされた定納地区の古墳は計7基であったが、北陸自動車道の敷設工事によって、定納6号墳（前方後円墳）と、同7号墳（円墳）は消失した。

またこれに次いで『前方後円墳集成』近畿編の「近江東部」に紹介された資料では、前期の古墳として認識されるに至った<sup>(29)</sup>。

また定納1号墳～5号墳は、1998年3月、京都大学文学部考古学研究室の有志で構成される「定納古墳群測量調査団」（魚津知克・村木二郎・岩田貴之・石村智・岩井俊平・佐藤数也・塩見佳子・下垣仁志・羽生牧子・竹隈あゆみ・中川あや・奈良匡訓・棚大輔・坂口英毅・鈴木香織）によって測量調査され、その成果が公開されている<sup>(30)</sup>。

定納地区の古墳のうち、最も北に位置する定納1号墳は、全長34.0mで、主軸がN-20'-Wを示す段築をもたない前方後円墳である。外形の特徴としては、後円部が縦に長い楕円形になることと、前方部が低平でほとんど開かない形態をなしていることが挙げられる。

後円部の頂上には8.2m×6.0mの楕円形を呈する平坦面が存在し、南東に向く前方部は、長さ14.3m、幅8.4mを測る。

#### 定納2号墳

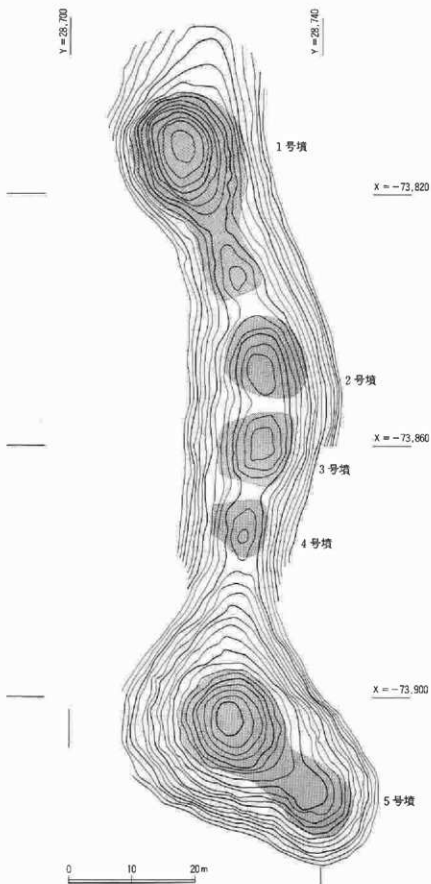
定納2号墳は、1号墳の南側に隣接する古墳で、狭まった尾根上に構築されている。直径12.6m～13.0mを測る不整形の円墳である。

#### 定納3号墳

定納3号墳は、2号墳の南側に隣接する古墳で、台形状に平面をとどめる方墳である。尾根における長さ12.0m、それに直交する方向で長さ11.4mを測る。

#### 定納4号墳

定納4号墳は、3号墳の南側に隣接する古墳で、台形状に平面をとどめる方墳である。9.2m×9.4m規模を測る。



第4図 定納1号墳～5号墳

(定納古墳群測量調査団「近江町定納古墳群測量調査報告」(『滋賀考古』第20号、1998年)所収(一部加筆))

#### 定納5号墳

丘陵尾根上で最も南に位置するのが定納5号墳である。同1号墳から伸びてきた尾根がY字状に分岐する交点に立地する。全長31.5mで、主軸はN-45°-Wを示す。外形上は同1号墳と異なり、後円部が整円形を呈する。後円部の規模は、16.2m～16.7mを測る。また後円部の墳頂には、径8.0m～8.9mの不整形な平坦面が存在する。また墳端から墳頂までの高さは2mである。

#### 定納6号墳

定納5号墳から緩やかに下る南西尾根に築造された定納6号墳は、全長約36mの前方後円墳であったが、北陸自動車道の建設によって消失した。

#### 定納7号墳

定納7号墳は、同6号墳の南西に築造された直径10m規模の円墳である。古墳の東半分を北陸自動車道の敷設工事によって消失させている。

#### 甲塚1号墳

甲塚1号墳は、横山丘陵の南端で、南に緩やか降りてきた支尾根の先端に営まれた円墳である。この古墳は、葦石を備えているものの、埴輪を伴わないと推測されている。墳頂部の標高は、約204.7mを測るが、琵琶湖の標準水位(84.371m)を引くと、平野部との標高差は約160m程度となる<sup>(21)</sup>。

古墳の東側および南側は急斜面がそのまま下方に向かって続いている。直径43m、高さ6mを測る大型円墳である。

#### 甲塚2号墳

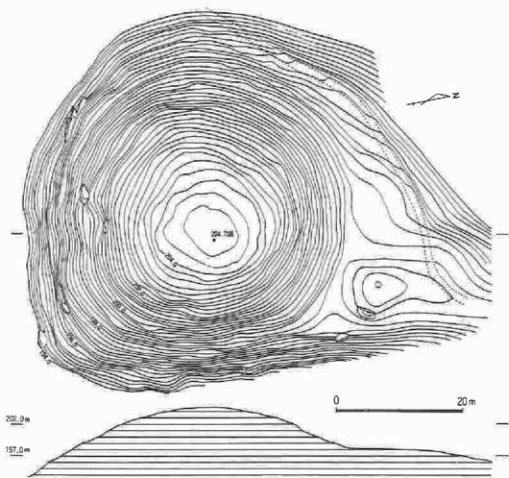
甲塚1号墳の大きな墳丘の北側に接して、高さ1mに満たない小さな不整形の高まりがあり、甲塚2号墳と呼ばれている。

#### アミタビ古墳

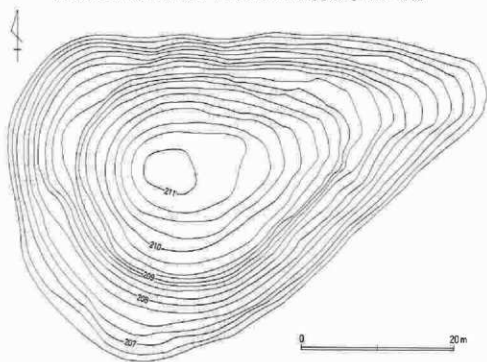
横山丘陵の最も南西端部に位置する尾根で近年確認された古墳。造り出し部を持つ直径30m規模の円墳。「アミタビ」とは、江戸時代の雨乞い神事に由来する小字名である<sup>(22)</sup>。

#### 日撫山古墳

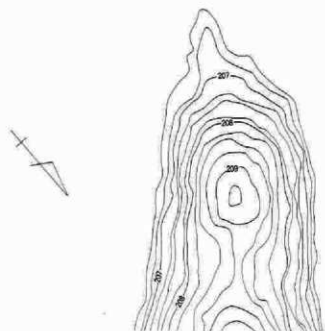
アミタビ古墳の東方約100mに所在する長辺15m・短辺13m・高さ1mを測る平面長方形の古墳。別名「朝妻古墳」とも呼称され、かつて円筒埴輪の表面採集があったとされるが、事実関



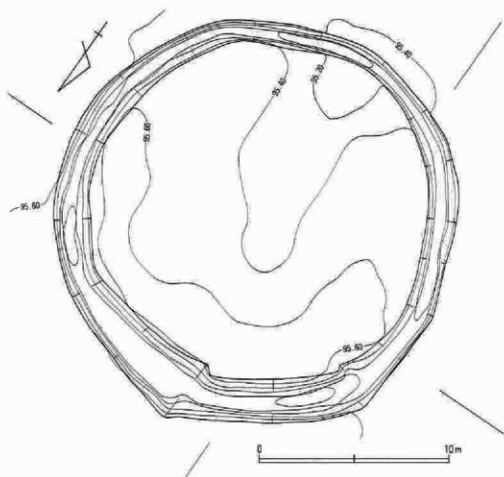
第5図 甲塚1号墳・2号墳 (S=1/600)  
 (京都大学文学部考古学研究室『琵琶湖周辺の6世紀を探る、1995 所収)



第6図 アミタビ古墳



第7図 日撫山古墳 (S=1/400)



第8図 西円寺第3号墳



係は明らかでない<sup>(213)</sup>。

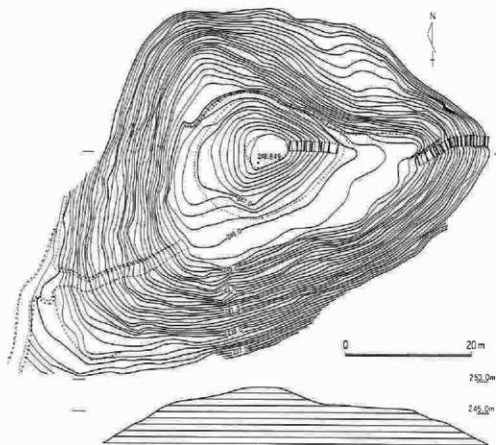
#### 西戸山 3号墳

一級河川「天野川」の左岸に所在する西戸山遺跡から発掘された平野の埋没古墳。造り出しをもつ円墳で、周濠内より円筒埴輪が出土している<sup>(216)</sup>。

#### 顔戸山砦 1号墳

顔戸山砦 1号墳は、横山丘陵の南部を北東から南西に伸びる中心的な尾根の最高所に位置する。この古墳は、葺石を持たないが、分布調査によって円筒埴輪片が採取されている。また名前の示すとおり中世の城郭として利用された遺跡であり、中世陶磁器や茶臼等の表面採集もされている。古墳は当初の形を大きく改変されているものと思われ、本来の規模などは明らかでない。墳頂部の標高は、約248.8mを測り、甲塚1号墳よりも約44m高い位置に立地している。

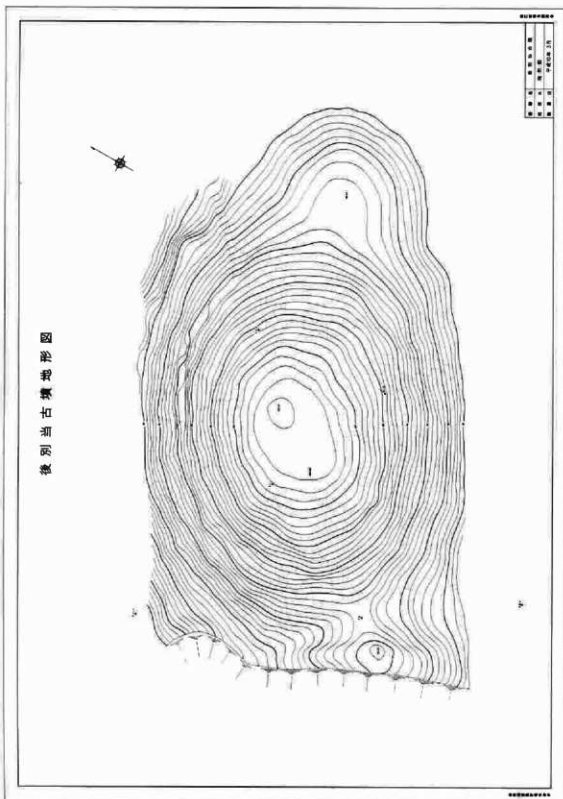
掲載した測量図は、1993年に京都大学文学部考古学研究室が作成したもので、1995年に同研究室が刊行した『琵琶湖周辺の6世紀を探る』に掲載されている<sup>(215)</sup>。



第9図 顔戸山砦 1号墳 (S=1/600)  
(京都大学文学部考古学研究室『琵琶湖周辺の6世紀を探る: 1995 所収)

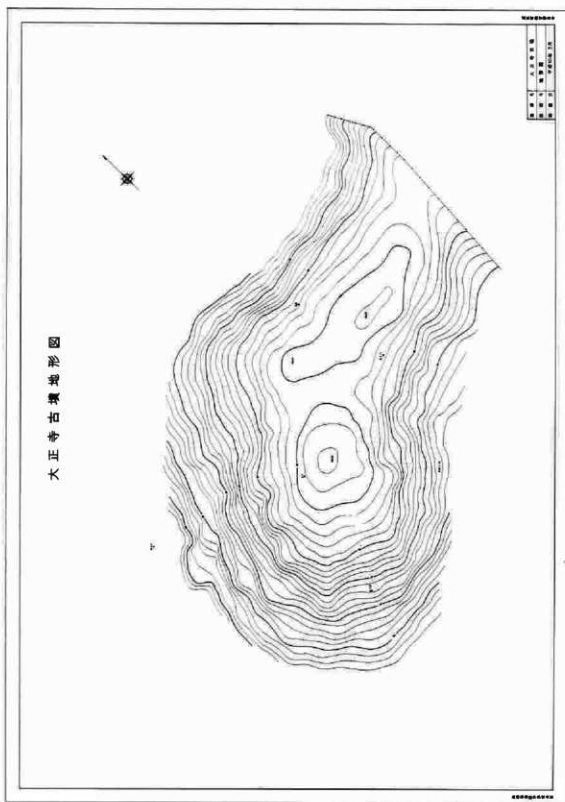
こべつとう  
後別当古墳

横山丘陵の南端裾部よりさらに南側で独立した小丘陵に東西2つ並んだ古墳が立地する。このうち西側に位置するのが後別当古墳。帆立貝形古墳として認識されている。



大正寺古墳

後当古墳の東側に位置するのが、大正寺古墳。円墳として認識されている。

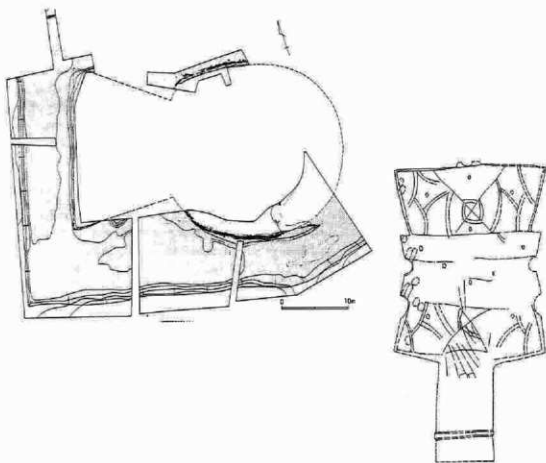


第11図 大正寺古墳 (S=1/400)

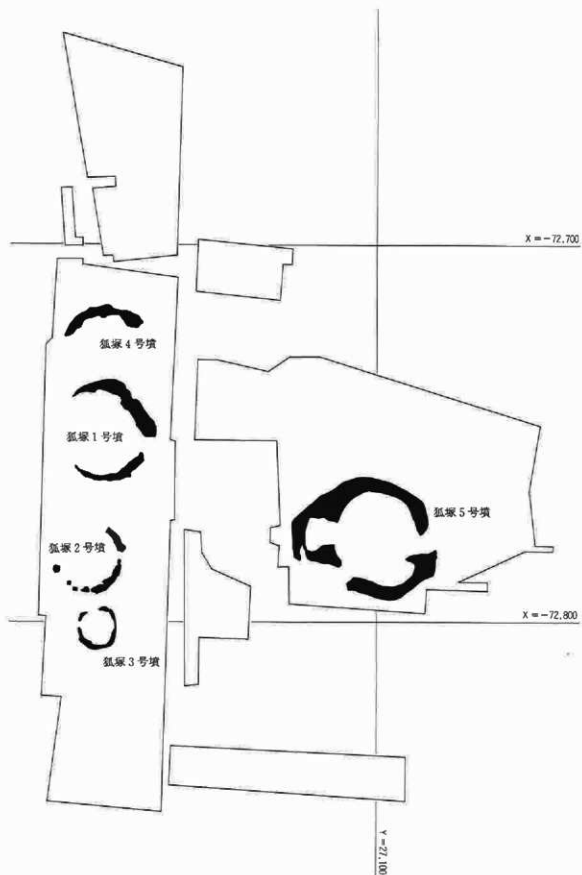
## 塚の越古墳

横山丘陵の裾部から南方へ約500mの平地に立地するのが後期前方後円墳。東西方向に主軸を持ち、東側に後円部、西側に前方部を備える全長46mの古墳。この古墳は、既に墳丘の覆土の大半を無くしており、一見したところ前方後円墳とは判りにくい。1989年に周濠部の発掘調査が実施され、現存の水田下から古墳本来の広がり、周濠の存在が確認された。発掘調査の結果、塚の越古墳には、墓石と埴輪が伴うことが確認され、特に墳丘裾部には石見型盾形埴輪の回ることが明らかとなった。また周濠内からは、本来墳丘上を飾ったと推測される家形埴輪・人物埴輪・馬形埴輪・鶏形埴輪などが出土している<sup>(16)</sup>。

この古墳から出土した遺物については、1925年に島田貞彦氏によって報告されており、勾玉と鉄をもつ金属製品（馬具もしくは甲冑）の出土が知られるほか、地元新庄薬師講には、踏み返し鏡群の「画文帯仏獣鏡」を模した仿製鏡が、同古墳出土として伝世されている<sup>(17)</sup>。



第12図 塚の越古墳と出土した石見型盾形埴輪



第13図 孤塚 1号塚 ~ 5号塚

#### 狐塚1号墳

狐塚1号墳～4号墳の4つの古墳は、一般国道8号(長浜バイパス)の建設に関連した狐塚遺跡の発掘調査で見出された埋没古墳である。南北90mの区間に4つの古墳が並び、北から順に「狐塚4号墳」「狐塚1号墳」「狐塚2号墳」「狐塚3号墳」とされ、40m東側に「狐塚5号墳」が控える。いずれの古墳も後世の削平を受けており、周濠のみを残す結果となっているが、その輪郭は不明であり、いずれの平面形も整形ではない<sup>(21)</sup>。

狐塚1号墳は、旧来より「狐塚古墳」として周知されていた箇所に対応し、発掘調査によって、北部に造り出しを備え、周濠をもつ直径約27mの円墳であることが判明した。発掘調査が実施されるまでに塚状の高まり(畑地)が存在していたものの、それは古墳と直接関連したものではなかった。

古墳は、すでに盛土を失っており、主体部等の施設も確認されていないが、北東部の周濠内からは、円筒埴輪・朝顔形埴輪・瓶形埴輪を中心に多量の埴輪が出土している。

#### 狐塚2号墳

1号墳の南約15mに位置し、水田化の平坦地に立地する。周濠最大幅は2m、深さ0.3mで東側半分の周濠のみが確認されている。推定復原によると、直径18m程度の円墳になると思われる。周濠内より須恵器の出土が認められる。

#### 狐塚3号墳

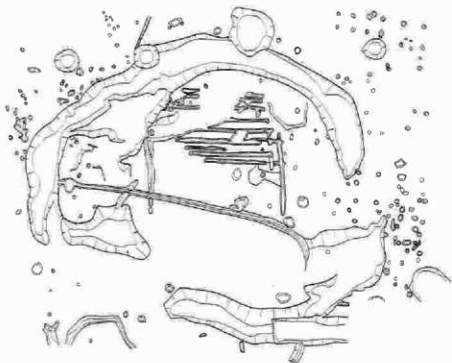
2号墳の南側に位置する直径10m前後の円墳であり、5基の古墳のなかでは最も小さい。最大幅1mの周濠を有する。

#### 狐塚4号墳

1号墳の北側20mに位置し、北辺の周濠内より須恵器の出土が認められる。古墳の南半部が消失しており、詳細には不明な点が多い。また北部には造り出しをもつと想定されるが、実際の古墳規模については判らず、狐塚1号墳との重層関係に注目される。

#### 狐塚5号墳

横山丘陵の西方裾部から約600m西方の平野部で見出された埋没古墳。5基の古墳中で最も古い年代のものとされる。東西方向に主軸をもち、西側に造り出しを備える全長30mの帆立貝形古墳。1984年に実施された発掘調査では、墳形にそった沿った形の周濠が確認され、造り出し部より、家形埴輪・盾形埴輪・瓶形埴輪・太刀形埴輪・蓋形埴輪・人物埴輪・鶏形埴輪など豊富な埴輪が出土している。また周濠内部から、烏形木製品も出土しており、土製の埴輪と木製の埴輪の両方を備えた古墳であったと推測されている。



第14図 狐塚5号墳 (S=1/400)

狐塚地区の5つの古墳では、その周濠部からの遺物出土が多く、築造年代の復原案が提示されている。最初に築造されたのは5号墳であり、これに続いて1号墳と3号墳が築造され、4号墳、2号墳の順の築造が示されている。帆立貝形古墳に続いて、4基の造り出しをもつ不整形な円墳の築造が狐塚地区の特徴といえる。

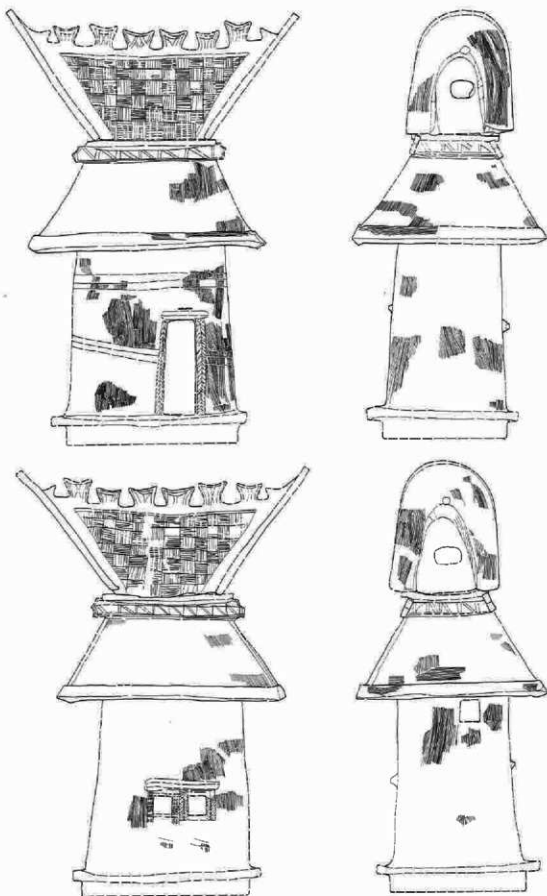
#### うめづか 埋塚古墳

横山丘陵の裾部から南西方へ約700mの平地で発掘された埋没古墳。天野川に近接した右岸で発見されている。埋塚古墳は、一辺40m以上の方墳と考えられており、発掘調査では、幅5～7m・深さ1mの周濠と考えられる遺構が発掘されている。また、この調査に先行する試掘調査では、6世紀前半代の須恵器が出土している。

#### かめづか 亀塚古墳

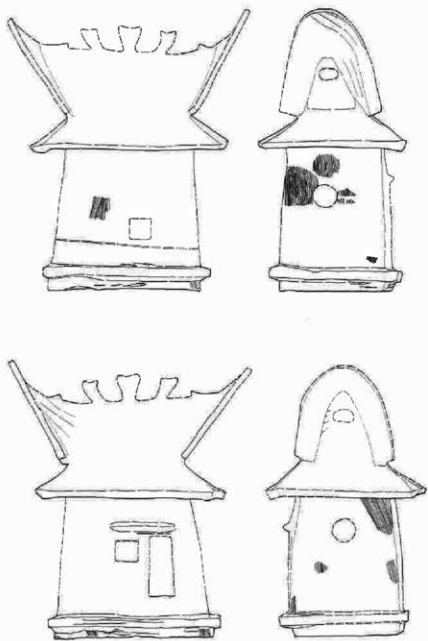
現在の「近江町立中央公民館」にあたる近江町顔戸字亀塚に所在する。6世紀中葉の須恵器と円筒埴輪が出土しており、地形図から東側に造り出しをもつ円墳と推定されている。この遺跡から出土した遺物には、古墳時代前期の土師器や、奈良時代の須恵器も含まれているが、これらの遺物については、隣接する顔戸遺跡の遺物と考えられる。

また周辺には「笹塚遺跡」「鳴子塚古墳」といった古墳伝承地が存在する。笹塚遺跡からは古

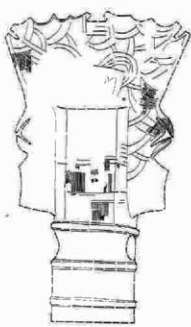


第15図 狐塚5号墳から出土した埴輪(1) (S=1/4)





第16図 狐塚5号墳から出土した埴輪(2) (S=1/4)



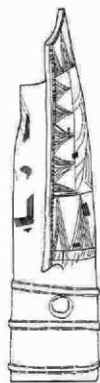
瓶形埴輪



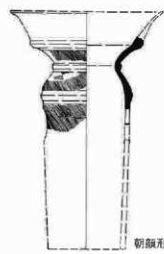
円筒埴輪 1



円筒埴輪 2

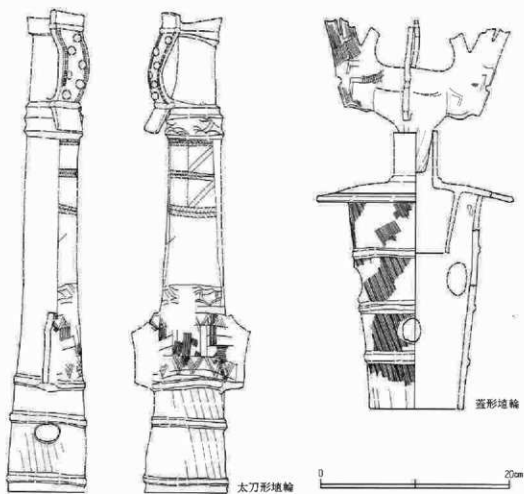


唐形埴輪

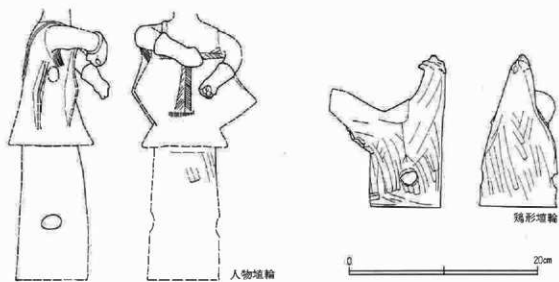


朝顔形埴輪

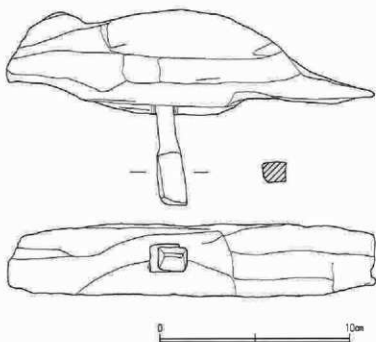
第17図 狐塚5号墳から出土した埴輪(3) (S=1/4)



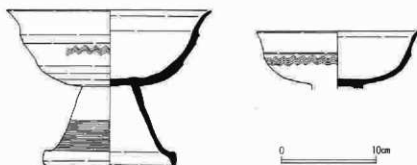
第18図 狐塚5号墳から出土した埴輪(4) (S=1/4)



第19図 狐塚5号墳から出土した埴輪(5) (S=1/4)



第20図 狐塚5号墳から出土した高形木製品

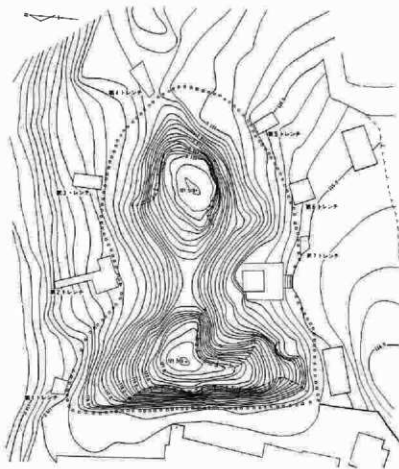


第21図 出土した無蓋高杯  
(埋塚古墳(左)・西円寺第3号墳(右))

墳時代後期の須恵器が出土しているものの、実態は明らかでない。

#### \*\*\*つるぎ山\*\*\* 山津熊神社古墳

横山丘陵南端尾根上に位置する前方後円墳。東西方向に主軸を持ち、東側に後円墳、西側に前方部をもつ全長46mの古墳である。この古墳は、1882年(明治15)に神社の参道拉輻工事に際して発見され、家型石棺を取めた横穴式石室の存在が明らかになった。石室の内部からは、鏡2面(仿製旋回式獣像鏡・仿製乳脚文鏡)・金銅製冠・鉄刀・水晶製三輪玉・鉄製刀子・馬具(轡・杏葉・鞍金具・輪燈・壺燈・雲珠・辻金具・鈞金具)・須恵器(蓋杯・提瓶・台付広口壺・壺・器台)・土師器(高杯)・赤色顔料が出土し、前方部より鏡1面(内行花文鏡)・鉄剣・鉄塊が出土したと伝えられている。また1994年に実施した調査では、古墳の裾部に石見型盾形埴輪



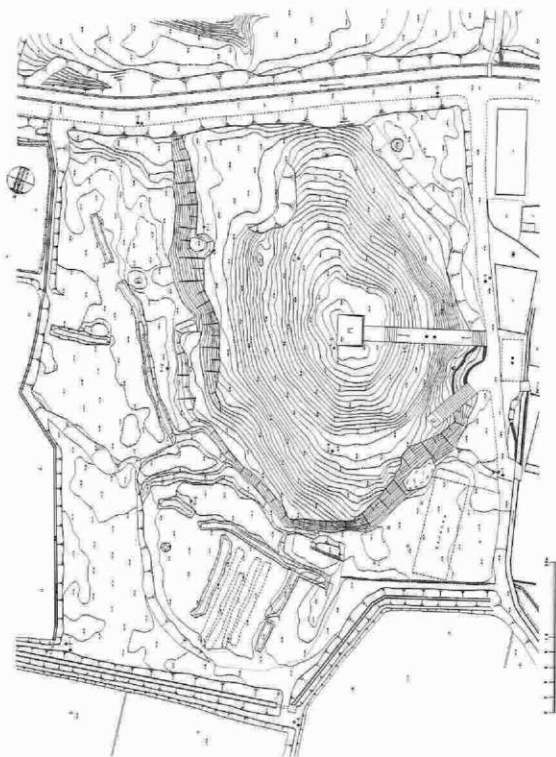
第22図 山津照神社古墳 (S=1:500)  
 (京大文学部考古学研究室「琵琶湖周辺の6世紀を探る」1995 所収)

の回ることが明らかになり、北側くびれ部に須恵器祭祀の痕跡が発見されている。

山津照神社古墳発見の状況については、当時の詳しい経緯と、古墳や出土品に関する報告書がある。これは山津照神社に保管されるもので、報告書の写しや下書きを含めて『古墳＝関スル書類』として一括綴られている。なかでも最も注目すべきは石室や出土品に関する詳細な絵図の存在である。絵図と記載文によれば、後円部に「石門」(幅三尺、高五尺)、「達道」(凡一丈五尺)、「室」(内法凡幅九尺、奥行一丈五尺、高七尺)からなる石室であったと記されている。

#### 人塚山古墳

顔戸山の北西麓に造られた古墳で、須恵器の杯・有蓋高杯・平瓶・細頸壺・直口壺等と円筒埴輪が出土している。従来は「前方後円墳」もしくは「造り出しを持つ円墳」とされていた。周辺の道路整備や住宅開発によって覆土の一部が削られており、墳形の実態解明については、発掘調査を待たなければならない。



第23図 人塚山古墳

奥深1号墳

能登源字奥深に所在する計6基の古墳。南から順に1号墳～6号墳と呼ばれている。最も南に位置する奥深1号墳は、丘陵先端の尾根上に築かれた円墳であり、町道バイパスの南側に位置する。古墳の規模は、直径約30m、高さ5mを測る。

奥深2号墳

奥深2号墳は、町道バイパスの北側に位置する。直径約10m・高さ2mの円墳。丘陵の南斜面に築かれている。

奥深3号墳

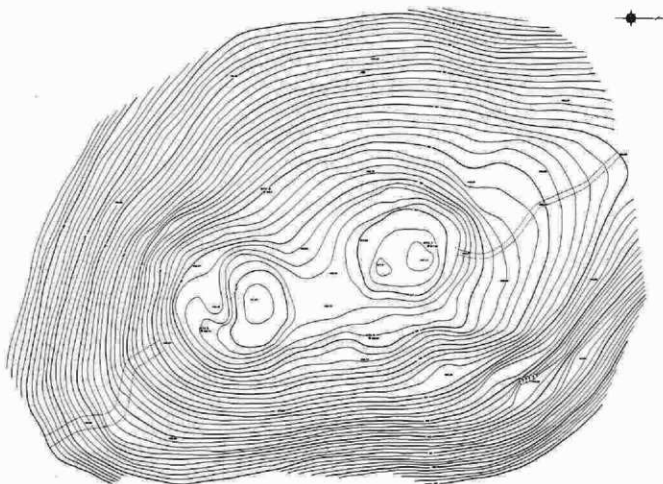
奥深3号墳は、同2号墳の北尾根上に立地し、4号墳と並ぶ。直径約21m・高さ2mの円墳で、墳頂に被掘穴がある。

奥深4号墳

奥深4号墳は、同3号墳の北側に隣接する。直径20m・高さ1.6mの円墳。これまでに須恵器の出土が伝えられている。

奥深5号墳

奥深5号墳は、同4号墳の北東200mに所在する。古墳は、標高160mに築造されており、直



第24図 奥深3号墳(左)・4号墳(右) (S=1/400)

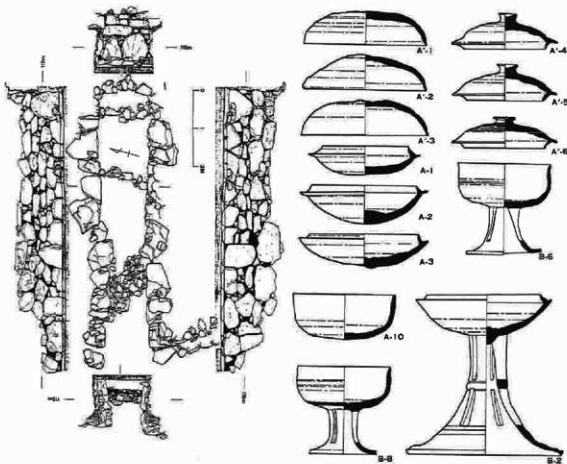
径22m・高さ5mの円墳と推定されている。墳頂には、被掘穴がある。平成12年度に発掘調査が予定されている。

#### 奥深6号墳

奥深6号墳は、同5号墳の北東120mに所在する。直径約20m・高さ3m規模を測る。円墳と推定されている。

#### 黄牛塚古墳

横山丘陵の南裾部にかつて所在した円墳。北陸自動車道建設工事に際して事前調査され、調査後は、道路下に埋没した。「黄牛塚」の名前の由来は、北近江に残される「後鳥羽上皇伝説」によるもので、名越潜幸の際、日撫神社に参詣し、奉納相摸鑑賞に際し、黄毛の牛を奉納したと伝えられる。この牛が百余歳の長寿の末に亡くなったのを埋めた塚が「黄牛塚」と伝承されている。藤原定家の「明月記」などから、「後鳥羽上皇の北近江潜幸説話」は伝承にすぎないとされるが、黄牛塚そのものは古墳であり、1975年の発掘調査では横穴式石室が発見され、須恵器・土師器・勾玉などが出土した。



第25図 黄牛塚古墳石室遺構図と主要出土遺物



寺倉古墳

天野川左岸、西円寺遺跡の東800mに位置し、地頭山から連なる丘陵の北裾部に所在する埋没古墳。1988年の試掘調査で円墳の周濠が発掘され、その埋土から円筒埴輪が出土した。丘陵の旧地形は、裾部をなだらかに下ろしていたものと推測されるが、現在の国道21号線敷設時に形状を大きく変化させているようである。

## 第4章 まとめ

平成8年度に着手した近江町息長古墳群の遺跡詳細分布調査は、平成11年度の報告書刊行をもって、ひとまずの区切りをつけることとなった。調査に際しては、国庫補助金・県費補助金・町単独負担金といった資金面はもとより、京都大学文学部考古学研究室をはじめとして、多方面からの援助を受ける結果となった。

これまで息長古墳群は、同じ滋賀県内の北近江地域に所在する高月町古保利古墳群、長浜市長浜古墳群に比較して、その出現時期が遅く、中期の段階を待たなければならないと言われてきた。しかしながら、定納古墳群の測量調査をはじめとした今回の詳細分布調査によって、その出現が古墳時代前期（西暦4世紀）に求められる可能性も濃厚となった。

定型化する以前の古墳「前方後方形周溝墓」や「円形低墳丘墓」の存在は、丘陵上の前方後円墳出現以前において、極めて重要な位置を占めているが、その一方で、5世紀後半代まで「周溝墓」の形状を留める西門寺第3号墳・狐塚1号墳～4号墳・寺倉古墳の存在も無視することはできず、同一地域の同じ時期に、「丘陵尾根の前方後円墳」と「低地の周溝墓」が共存することも明らかとなった。また、これらの古墳（周溝墓）には、「造り出しを持つ円墳」といった共通項も認められるに至っている。

また築造年代の上では、「アミタビ古墳」や「奥深5号墳」といった発生期古墳の可能性もつものも含まれており、今後の課題を残している。

今回の調査は、測量調査を中心として実施しており、平地の発掘調査結果を加えた形で報告としている。これらの中には、「後別当古墳」や「人塚山古墳」に代表されるように、旧来の評価に再検証が求められるものも含まれている。今後の発掘調査によって、正確な評価が下されることを期待する次第である。

木筆になったが、本詳細分布調査に際して、ご協力をいただいた関係者と諸機関に謝意を表する次第である。

註1：大橋信弥『日本古代国家の成立と息長氏』（1984年。吉川弘文館）

註2：高月町教育委員会『古保利古墳群詳細分布調査報告書』1995年

註3：京都大学文学部考古学研究室『琵琶湖周辺の6世紀を探る』1995年

註4：定納古墳群測量調査団『近江町定納古墳群測量調査報告』（『滋賀考古』第20号。1998年）

近江町教育委員会『近江町文化財調査報告書 第14集 奥松戸遺跡』1992年

註5：滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会『一般国道8号（長浜バイパス）関連遺跡発掘調査報告書IV』1987年

滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会『一般国道8号（長浜バイパス）関連遺跡発掘調査

報告書V」1988年

近江町教育委員会『近江町文化財調査報告書 第6集 法勝寺遺跡』1990年

註6：近江町教育委員会『近江町埋蔵文化財調査集報1』1995年

近江町教育委員会『近江町文化財調査報告書 第8集 埋塚遺跡』1991年

註7：近江町教育委員会『近江町文化財調査報告書 第4集 高溝遺跡』1990年

近江町教育委員会『近江町文化財調査報告書 第5集 顔戸遺跡』1990年

註8：近江町教育委員会『近江町文化財調査報告書 第12集 黒田遺跡』1991年

近江町教育委員会『近江町文化財調査報告書 第13集 黒田遺跡2』1991年

近江町教育委員会『一般国道8号（米原バイパス）関連 黒田遺跡試掘調査概報』1992年

近江町教育委員会『近江町文化財調査報告書 第17集 黒田遺跡3』1994年

註9：用田政晴『近江東部』（『前方後円墳集成』近畿編。1992年）

註10：前掲書（註4）

註11：前掲書（註3）

近江町教育委員会『近江町地域文化叢書 第1集 息長古墳群』1996年

註12：前掲書（註11）

註13：近江町教育委員会『近江町文化財調査報告書 第1集 近江町内遺跡分布調査報告書』1987年

註14：近江町教育委員会『近江町文化財調査報告書 第16集 西円寺遺跡』1993年

註15：前掲書（註3・註11）

註16：近江町教育委員会『近江町文化財調査報告書 第10集 塚の越古墳』1991年

註17：島田貞彦『近江国坂田郡能登瀬の古墳』（『歴史と地理』15-3）1925年

註18：前掲書（註5）

近江町教育委員会『近江町文化財調査報告書 第19集 近江町埋蔵文化財調査集報2 一狐塚遺跡発掘調査報告書一』1996年

註19：近江町教育委員会『近江町文化財調査報告書 第9集 埋塚遺跡2』1991年

註20：前掲書（註3・註11）

註21：前掲書（註11・註13）

註22：前掲書（註11）

註23：滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会『黄牛塚古墳』（『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ』）1976年

## 報告書抄録

ふりがな	山津照 じんじやう じんじん							
書名	息長古墳群 1							
副書名	遺跡詳細分布調査報告書							
巻次								
シリーズ名	近江町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第20集							
編著者名	宮崎幹也							
編集機関	近江町教育委員会							
所在地	〒521-0072 滋賀県坂田郡近江町願戸488-3 TEL 0749-52-3111							
発行年月日	西暦2000年3月30日							
ふりがな 収録遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
山津照 じんじやう じんじん 神社古墳 ほか	滋賀県 坂田郡 近江町 能登瀬	254649		35° 19' 45"	136° 19' 30"	19970701 ～ 20000331		遺跡詳細 分布調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項

# 图 版



定納5号墳測量風景



定納5号墳測量風景



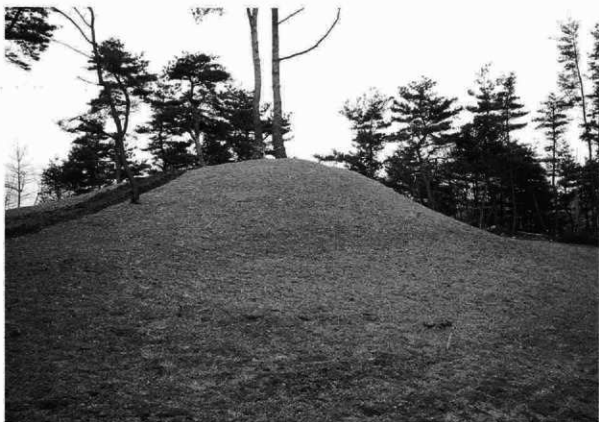
甲塚1号墳



甲塚1号墳の墓石



日撫山古城



顔戸山髷1号墳





塚の越古墳



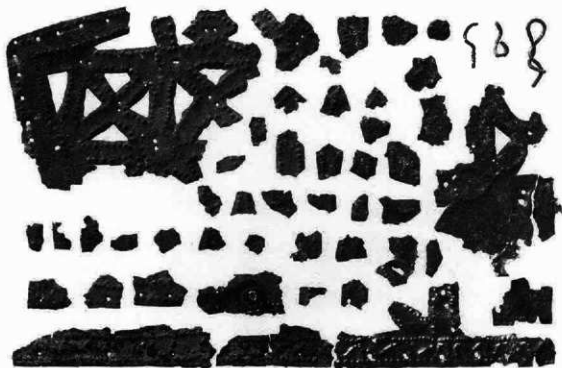
塚の越古墳 裾部の葬石と柱穴列



塚の越古墳出土石見型盾形埴輪



北陸自動車道側道下で検出した塚の越古墳の一部



山津照神社古墳出土の金銅製冠



狐塚5号墳出土の埴輪



狐塚5号墳出土の鳥形木製品

近江町文化財調査報告書第20集

息長古墳群 1

—遺跡詳細分布調査報告書—

2000年 3月

編集・発行 近江町教育委員会

〒521-0072 滋賀県坂田郡近江町顔戸488-3

☎0749-52-3111

印刷 有限会社 真陽社